

佳作

「私の未来は、なに色？」

一人のため、救うため―

千葉国際高等学校2年

半田 千夏

白いナース服に身を包み、鏡に写る私の姿は、自分が描いている夢の姿には何だか少し足りない気がした。私が憧れている看護師さん達のナース服はもっと凛として見えて、もつとかつこよく見えていたのに、と私は思う。しかし一方で、その欠けている何かに対して、ワクワクしている私もいた。看護体験で白いナース服を着る度に、夢への気持ちも強くなっていた。『看護師になること』。それが今の私にとつての夢でもあり大きな目標でもある。真っ白なナース服を着て日々を戦う看護師さんの姿は本当にかっこいいと思う。あんな風にかっこいい白になりたい、と私は思う。

今でこそこう思っている私だが、決して最初からそう思っていたわけではなかった。実際に現場を見て何かを感じる前の私は、偏見をもった目で看護の世界を見つめていた。『重労働』『きつい』そんな言葉がいつも私の脳裏には浮かんでいた。『人のために働く仕事がいい』とあって、初めて看護体

験に参加するまでは、大切な事を私は見ようともしていなかった。

初めて体験に参加した時も、その後何回か行った先でも同じ事が何度も伝えられた。『決して看護というお仕事は楽なものではありません。辛い事、厳しい事が必ずたくさんあるお仕事だし、何よりも人の命を預かっている、という責任感はとても大きいものです。』と。言われる度に私は自分の夢に恐れや不安を感じずにはいられなかった。確かにそうなのだ。医療に従事するということは、自分のミス一つで命を無くしてしまうかもしれない危険性にもなう責任を負う必要があるということなのだ。自分は果たしてその責任を負いながらやれるのだろうか。今の私にその答えを出す事は難しかった。しかし、体験の回数を重ね、一つずつ看護を知っていくうちに、不思議と不安や恐れは少しずつ薄くなっていく気がした。『百聞は一見にしかず』。その言葉通り、私の不安をなくしていくてくれたのは、まぎれもない、現場で働く看護師さん達だった。

どんな患者さんに対しても明るく、誠実に向きあい、一人一人にあった看護を提供していた。病態があまり外見にでないため、外科の患者さんよりも精神的ケアを大切にしなければいけない内科の患者さんには少しでも不安を無くしてもらえるように、声かけを多くしていたり、リハビリテーション

の患者さんには、病院が閉鎖的な空間だと思われぬように、家族のように接していたり、とても小さな違いではあるが、一人一人に対する看護を大切にしている看護師さん達の姿がそこにはあった。みな同じナース服を着ているはずなのに、患者さん達と向きあっている時のナース服は、それぞれの患者さん達の色に染まったナース服を着ているように見えた。

また、ケアだけではなく、医療ミスが決しておこらないように、薬の種類や量、投与する患者さんの名前を確認する時も、必ず二人がかりでダブルチェックをしていた。今度は、さっきまで色とりどりに染まっていたナース服が真っ白に輝いて見えたのだ。二人の看護師さんの顔は真剣そのもので、すごくかっこよく見えた。ある時、看護師さんにこう質問をしてみた事がある。『看護というお仕事は恐いと思つた事はありますか？』看護師さんは昔を懐かしむような顔をしながら、『もちろんありました。自分のミス一つで命を失つてしまうかもしれないからね。だけど、ミスはいくらでも防ぐ事ができるんです。看護という仕事は一人でやるものではなく、みんなで作っていくお仕事ですから、みんなでミスを防いでいくんです。それに勤務してみると、恐いという気持ちよりも患者さん達の笑顔が見られることにやりがいを感じます。看護っていい仕事ですよ』。私はこの時の看護師さんの笑顔と白いナース服が頭から離れなかった。一人ではなくチームで

向きあつていく。それぞれ違った色が集まつて互いを助けあつていく『チーム医療』というものが、こんな風に必要となり、互いの負担を軽減しながらも、よりよい医療を提供できている理由となつていくんだ、と実感した。だからこそ一人一人が自分の色を一生懸命發揮し、それがやりがいにもつながるのだなと思つた。

看護に大切な事が何かなんて、今の私にすべてわかるわけではない。でも人の事を考え、どうしたら良くなるのだからかと考える過程すべてが大切なように思える。決して一人で成長していくわけではなく、あの白いナース服を、何人もの患者さん色に変えていく事で、私達はきつと成長ができると思うからだ。私はそんな白になりたいと思う。どんな色にも染まる事のできる白に。そしてそんな白が責任感や積み重ねた経験でもっと輝けるように。私はそんな白を目指してこれからも頑張つていく。